

好きなことを好きなようにやることができるのが農業の魅力！！



尾崎晃一さん（大阪府出身 48歳）

尾崎さんは13ヘクタールのコメの無農薬栽培をしています。

無農薬栽培は大変ですが、とても好評で年間120件以上の顧客がいます

📌 農業に興味を持った理由

大阪出身の尾崎さんは中学生のころ、都会にいと便利すぎて逆に何か物足りないと感じ、田舎暮らしがしたいと考えていました。大学生時代はサラリーマンにならず、自分が起業して経営者になりたいと構想していました。

📌 農楽舎に行こうと思った理由

当時の尾崎さんは田舎が好きというのもあって自然体験のボランティアに参加しました。そこで、かみなか農楽舎の立ち上げ担当の人と出会い、創設メンバーに加わり、翌年、自ら研修生の一期生として農業に関わるようになります。

研修生2年目に自分で自由につくっていい田んぼをもらえて米を育ててみると、
好きなことを好きなようにやることができる

という魅力にひかれていくのです。

また、研修生の自分から米を買ってくれる人もでてきて、すごくやりがいを感じ、自分で独立して米作りをしたほうが楽しいと分かってきます。経験のない研修生に田んぼを任せるという仕組みで、尾崎さんは自分のやりたい農業を見つけていくのです。

📌 尾崎さんが農業をする上で大事にしたいこと

尾崎さんは無農薬米を育てています。それは大学時代に循環型の農業を学び、生き物の保全に関心が生まれたことが原点となっています。

そして今も無農薬を続けている理由は、

難しいことに挑戦したいからです。

農薬を使った方が楽であり、稼ぎやすいですが、尾崎さんは農業における自分の世界作りに挑んでいます。その結果、できた無農薬米を喜んでくれるお客さんがいて、それがやりがいとなっているのです。

尾崎さん以外にも自分の世界をもってみんながそれぞれのやり方で正解が一つじゃない 農業をしていると教えていただきました。

📌 Yu comment

尾崎さんを一言で表現するならば、

一面倒くさいを楽しむ人ー

尾崎さんの、難しいことを楽しんで取り組んでいるという価値観に僕は驚きました。今、つらいと思っていてもそれをどう楽しむかと前向きに考えればおのずとやる気が出てくることが分かり、それを農業で挑もうとする尾崎さんがいい意味で変人だなと思いました。

都会につかれた、自分の世界を作りたい人に
かみなか農楽舎、どうですか？



現在は若狭町で梅の里でレモンや梅を作っている

小林直哉さん（40 歳） 自分の直感と興味で農業にたどりつく

〇小林さんが農業に興味を持った理由と魅力

埼玉県出身の小林さんは今、梅をメインにレモンやフィンガーライムを育てています。
小林さんは 23 歳まで飲食業で働いていました。しかし、自分が本当に何をしたいのか分からず、考えているうちに田舎で体を動かした方がいいという思いが芽生え、農業を志すようになりました。そこで実際に農業を体験して感じた魅力は、自分の好きなように仕事が出来て作業を決められたり、自由な時間をとれたりすること、都会と違って人間関係によるストレスがないことです。都会ではいつも通勤で満員電車で揺られますが、農業ではいつも自然を相手にするので、人とのストレスはないといいます。それが小林さんにとって居心地がいいのです。
また植えて、育てて、実がなるということは純粋に面白いし、楽しいと語ります。

〇農楽舎に行こうと思ったきっかけ

就農するためにどこで農業を学べば良いか調べていた小林さん。
そんなある日、「かみなか農楽舎」のホームページを見つけました。その後、実際に農業フェアで農楽舎の説明を聞きに行くと

直感で農楽舎に行くことを決意しました。

初めの頃は、一週間だけ研修する予定でしたが、余りに居心地が良くて一度も帰らず 2 年間研修生として農業を体験しました。そして梅の育て方を学ぶために親方の元で一年間学び、独立して梅農家になりました。

〇農業をする上で大事なこと

無用な気を遣う人間関係が好きではない小林さんですが、農業で大切なことは集落の人と仲良くすることが大事だと教えてくれました。作業は一人で出来ますが、困ったことがあったときには誰かに助けてもらわなければなりません。普段から気にかけてもらえるように自分にとって身近な集落の人との人間関係を大切にすることが、家族との生活や農業をする上で欠かせないのです。

今の小林さんの夢は、梅の里地区にしだれ梅を植えて、地区中にしだれ梅を咲かせて自分がここに生きた「証」を創ることです。

〇Yu comment

そんな小林さんを一言で表現すると

一自己理解をしつつも、
自分の直感と興味で動いている人一

今回でインタビューをさせていただいたのは五人目ですが、農楽舎に入った理由が直感ということで今までの農家の方にはない斬新さがありとても驚きました。

小林さんのような素敵な農業人はまだまだ他にもいらっしゃいます。
ぜひみなさん、「かみなか農楽舎」で農業してみませんか。

松屋和彦さん（大阪出身）

☺農業に興味を持った理由

大阪出身の松屋さんはかみなか農楽舎に出会うまで服屋や飲食店で働いていました。

そんな都会で働いていた松屋さんが農業に興味を持った理由は

「米を作るのってかっこいいんじゃないの？」です。



ある日、松屋さんは自分の全く知らないことをしたいと考えます。そして松屋さんは今まで自分がサービス業で働いてきた経験から米を作ることなどの第一次産業はすごい、という農業に憧れの気持ちを抱くようになりました。

実際に農業をしてみると、

夏は暑く、体はきつい、汚れる、体中はかゆくなる、肥料臭い、汗をかく
でも、**めちゃくちゃ面白い**

自分が作業することによって変化する景色を見ることができ、
自分が作った米を友人に送ったり地域の人に食べてもらったりすると感謝してもらえる、
そのおかげで今まで大変だったことがすべて飛んでいくのだそう。

松屋さんは消費者の笑顔にやりがいを見出しているのです。

☺農楽舎に行こうと思った理由

松屋さんは農業の知識や経験がゼロでも新規就農できる「かみなか農楽舎」に魅力を感じ、研修生としてお米を作り始めます。そこで、松屋さんは自分で作った米や野菜を食べることが都会にはない、ぜいたくな暮らしだと気づきます。
都会と違い、何も無いのが逆に新鮮だと感じているのです。

☺松屋さんの思う農業をする上で大事にしたいこと

松屋さんは

「飛び込む勇気」 「積極的に人と関われること」

が大事といいます。はじめての経験でもそこに飛び込んでいかなければ、何も変わりません。そして、農業をする上で人とつながりを持つことが大事です。農業は一人でするものではなく誰かと関わり合ってこそ成り立つものなのです。

それらのことに気づかせてくれたのは若狭町の人々でした。松屋さんは自分が若狭町に来た当初、現地の人々がよそ者の自分をととても歓迎してくれたことにとても感謝しています。
それ以来、若狭町の一番の魅力は“人”にある、ぜひ農業をするなら農楽舎に来るべきだと教えてくれました。

☺Yu comment

ー楽しみを見つける達人ー

私がまず初めに抱いた松屋さんの第一印象は、「毎日を楽しんでる人だな」です。
松屋さんは長年働いてきた仕事をやめ、一から農業を始めました。自由に縛られずに生きているけれど、人とかかわりをどんな場所でも大切にする、その生きる姿勢を自分も見習いたいと思いました。

研修生には世界一笑顔が素敵な松屋さんもいます。
ぜひ、かみなか農楽舎で農業してみませんか。



神谷農園で米を作っている

中村 康志さん (30)

◎ 中村さんが農業に興味を持った理由と魅力

兵庫県出身の中村さんはもともと自然が好きで、幼少期のころから祖母の家の畑を手伝っていたことから農業への興味が芽生えました。そして農業が楽しそうという興味のもと大学卒業後に農楽舎の研修生になりました。実際に中村さんが農業を体験する

自然の中で作業をする、肉体労働をする、新鮮なものを食べることができるのがわかり、農業の道を歩んでいくのです。そんな中村さんが考える農業の魅力は自分が作ったものを食べることができることと、地域のつながりを大事にすることで、土地や地域を守れることです。自分が

美しい田園風景を守る という役割を担っていることを誇りに思い、

「いつもありがとう」と地域の人に感謝されることに嬉しさを感じているのです。

◎ 農楽舎に行こうと思った理由

中村さんは大学の農学部でのインターンシップで農楽舎と運命的に出会います。そこで体験してみるとここにいる人たちは楽しそうだと感じます。農学部では研究がメインだったので、実際に作物を自分の手で作りたい中村さんは農業を学ぶために就農フェアに行くことになります。そこで出展していた農楽舎の方とたまたま出会い、縁があって声をかけてもらったことで研修生になりました。

◎ 農業をするうえで大事にしたいこと

中村さんはいまの神谷農園で農業をしていく中で、たとえそれらがばらばらに見えるように見えても一つ一つの作業を丁寧にすることがすべてつながっていることに気づきます。

それだけではなく、地域の人とのつながりを大切にすることも欠かせないと感じています。

そんな中村さんは「百姓」という言葉にあるように百の仕事ができるようになりたい そうです。

中村さんは独立したいのではなく、自分から学んでいって、習得し周りから信用されるような人間になりたいのです。

◎ Yu comment

そんな中村さんを一言で表現すると

— 小さなことでも極めることが誰かを幸せにしている —

中村さんは、自分はまだ一人前じゃない、だから頑張りたいと感じています。

そんな果て無き向上心がある中村さんのような方のおかげで今日、私たちの食は守られています。そのことに対する感謝をいつまでも忘れないようにしたいと思う一日でした。

中村さんのような素敵で農業人はまだまだ他にもいらっしゃいます。

ぜひみなさん、「かみなか農楽舎」で農業してみませんか。



八代恵里さん (かみなか農楽舎取締役)
～農業に熱い情熱を持った人を育てたい～

八代さんが農業に興味を持った理由

もともと大阪出身の八代さんは子どもの時から自然に興味がありました。コンクリートから生えてくる草をとって遊んでいるような子どもだったそうです。そんな八代さんは大学時代の子もたちとの自然体験のなかで、農業の魅力を感じます。

それは、「食べ物を作ること」です。

一見単純のように思えるかもしれませんが、食べ物を作ることによって私たち人間は生きることができ、農地を守ることができます。そして、八代さんが大切にしたいのは何気ない日常にある家族との食卓の風景です。この野菜は自分たちが作ったんだよ、とかこれは誰々が作ったナスや、などのような会話ができる、それは当たり前なだけで大切にしていきたいと八代さんは教えてくださいました。

そして、家族のために作った物が余ると他の人に商品として食べてもらう、そうした幸せの循環とその循環を繋いでくれた今までの農家の方たちの土地をこれからも次へ紡いでいきたいそうです。

農楽舎に行こうと思った理由

自分ができることを社会に役立てたいと考えた八代さんは、大学生時代に農業の法人のインターンシップや農業学校の体験、知り合いの田んぼの観察など、模索をしています。

そんな中、ゼロから農業を始められ、地元の農家との関係を縮められる「かみなか農楽舎」と出会います。八代さんは当時、ほとんど農業を知らなかったそうですが、農業の世界に飛び込むことになります。そして、定住して22年目の八代さんは未だ研修生感覚で楽しんでいます。

八代さんの農楽舎に対する想い

八代さんは「かみなか農楽舎」を卒業して農家にならず、そのまま農楽舎の社員として働いています。それはなぜかという、八代さんは自分が育てた研修生が成長する様子を見るのが好きだからです。基本的に研修生は卒業すると若狭町で農家になり、巣立っていきます。その後も卒業生たちはお互いに農業経営について刺激し合ったり、助け合ったりして人の輪が広がっていきます。そんな姿を見て八代さんは嬉しい気持ちになります。

Yu comment

八代さんを一言で表現するならば、

—農業に熱い情熱を持った人を育てることに価値を見出している—

大人になったら、何かと制約を受けて好きなことができなくなってしまう。しかし、八代さんは自分の将来について模索し、今、生き生きと日々を過ごしています。

子ども時代の自然に対する純真さをもちながら、農業を守ろうと奮闘する、そんな素敵な人が自分の町にいて暖かな気持ちになりました。

八代さんのような素敵な農業人はまだまだ他にもいらっしゃいます。
ぜひみなさん、「かみなか農楽舎」で農業してみませんか。